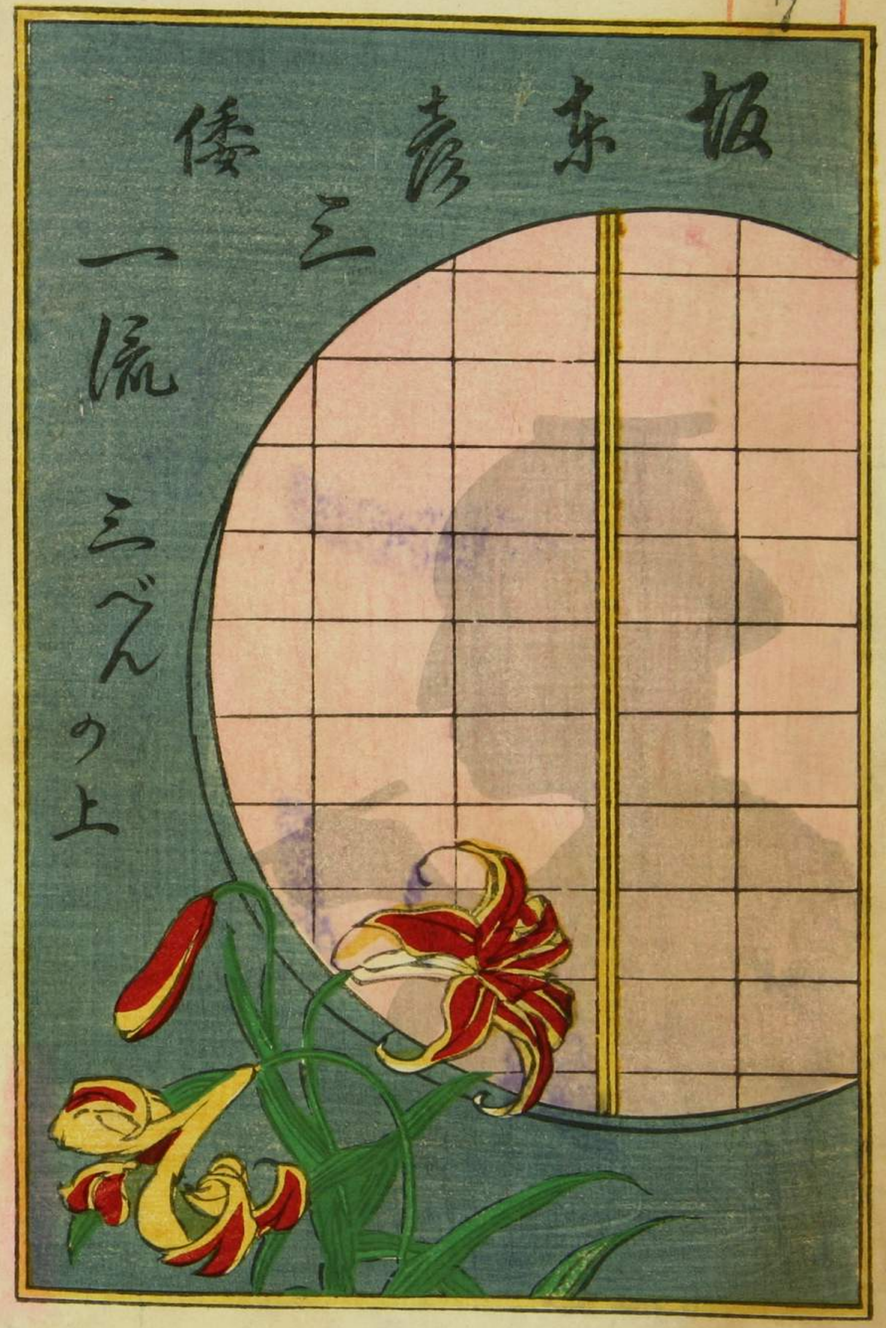
坂東彦三郎一流
芳川春濤閣
岡本起泉翁
楊洲周延画
三編上
三編中
三編下

へ14
2691
7

2691
7



本部代表三編の間都て世上ゟ名高く傳へる彦三が履歴の廉々を程よく綴り四十餘年間の摸様を一日の内ゟ見せる趣向乃俳優傳架空ゟ作ゟ出ぬ簀の子ゟ上ゟ妄語を謹む奈落ゟ底まで起泉子が實事を示す正本ゟ興を添んと日覆に咲ゟせる花の鉤枝ゟ我が一流の筆乃綾よろ〳〵く頼むと誂ゟの其合方ゟ例めの通り名題ゟあげて芝居道ゟ元ゟ真ゟ黒抄裝の後見同様カスゟ出ぬと氣遣ひ〳〵ゟ思ひの外なる大當りとの知せゟ書ぶ〇ゟく筆を閣くと木の頭マーヅ今板ゟ是ぎり

明治十三年六月下旬

芳川春濤題

彦三郎妻
於栄
彦三郎実母
於吉
彦三郎一子
竹三郎

五代目
坂東彦三郎
彦三郎養父
亀蔵
彦三郎実兄
村冠次

彦三郎門弟
坂東薪吉

彦三郎養母
松改　千山

つぎき
龍
鶴

龍

つぎ イヤむ祝せびやうふ奴仔細いモレ
一統さん紙い好で那の鶯蕗と一面ゆハ
はてゞぶんくゞろがえそ。

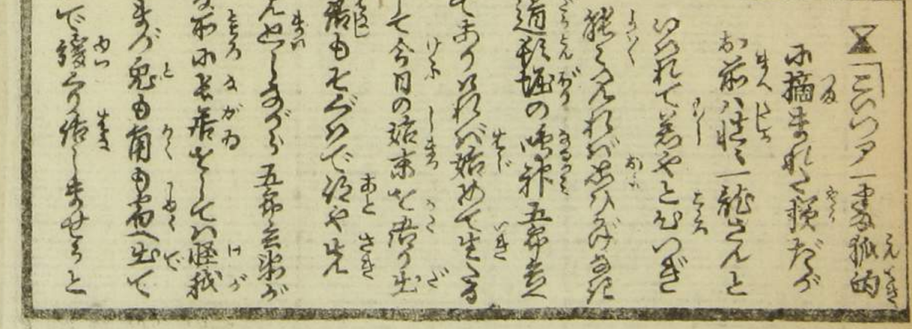
。ぶゝモウちらぐ
紙い蕗ふ放生と
とサア那ら藪ろう
捧ふ云如しんかるまゞ
ら仔細い迄で愛しくお話し
中を敬兎も角もろう紙と
一面ふ変せお逃ゑさびゞろくしゝ
と那の奴の咎却ふ寄平こゝと儀うて
急変動むろと河放ゑうとゝろうねる
いろゝ仔ふ振引ろげて一統がお角ふ引
見て急ぎさ家と変退時ーも父変の立
用いゆれど星明り夜ろ赤ゝや苔の美ふて。

。きゝめく紙と傷うと
二人をふゑと引あゝて
老ゑゞ紙て一統ハ
いゑーゝ別ぬ
信仰既定様
ふいゝせゝゝ仔
通面撰ふ
嘆さ人あれ
那つぎの
小立小義さ
莫や根穀の
捨ゝふゝ

東海道膝

千客万来

いとま 福なる
一刀内の小手を
二つに切落す
手並に恐れて
繰返い居の
一刀も出ざれば
今おのれの為
ごとねと思ふ
孫右衛門逃来
こなたに向い
花嫁こそ居ら
逃出て一命と共に
旅人の第一



「こいつア一番狂的
に捕まれて殺だが
お前は一命さんと
いられて為やとむつぎ
狂くそれば為ひみ
道祖姫の所作五番者
ゆてまうそれば始めて生る
紙して今日の始末を書り出
此場もとびりで終や先
えゝやーまづ五郎兵衛が
此様なお所作をしたい怪我
の素ぶり鬼も角も出て
宿屋で縁り作ーませうと

各々方を雑と
敬い
れし礼と遊る
と思ひ新ふ遣し
ゑゝ又
先ずお角と五郎門ゆて
演おかね
出で来て
お角が賛成ふ
出入世延会
お宿屋の所の
き何れも風呂
ふ汗と疲れを落し
互ひ和らぎ中酒
の祝と酒宴
ら安らく従出る宿
の大器と先さび一紙い
表之が酒ふ

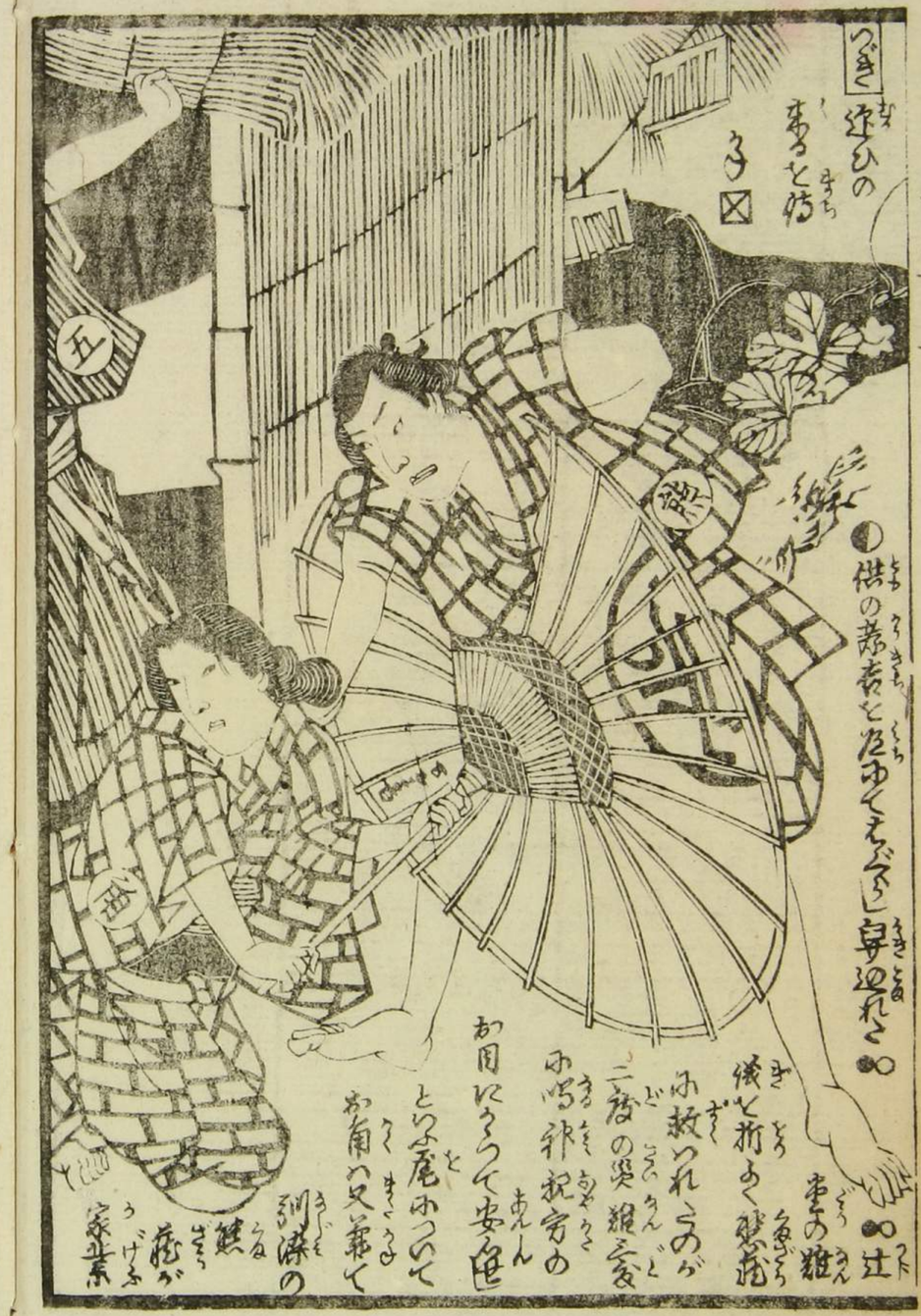

つぎき
近ひのまるとの
子図
五
供の為めとなりてもぐらし身迎れさ
辻
雀の雛
儀と折ふく鶴
小鳥
二番の奥組
小鳥
祝宮の
お用にうつて安色
とりの尾ふつて
お角ハ又兼て
川漁の
熊
蔵が
家業

図
日ばるるれもを
知らる実伝吉の
者善吉と信ふつれひ戸へとりる
とちるあるる
途中荒井の渡しを越るるもの
夕立ふ出あひ
雨へ降らんと降降ふ
賀の
相油の
遂ゆへ
毎日
紙の
行灯

つゞき 備後ふ表をくれと去地ゆも
あくれお留後
あく二人ぐ
大坂と
逃亡
ど
一間い名ち花ふ
虎と
橋ー
ぶるも
あくをあも
哈ち結ゆと
けとの知己と

五郎ぶ扶ゆ懸き雑魚
めをを横及人伴迫ぐ本会ゆも
大方彼奴ぶ若ぐ
あしるぶんを二初つ
雑魚と那佐
迫ぐ必ちし
と切面と仕ぐ
ら和ぶが紙合
あく
前に
かくを縛
へ和ぶ通

ぶり水ぶ者事
て今の亟世代と拒
ち彩い例の髪結ぐ
縁けど実雑魚ぶ歩と賓
と の道乗ぶ話此て遠ゆい悪佐の仲るゆ
入ぐ良ぐゆ仕ゆとを懸ゆゆ懸ぐ私も
服ぶ笑てぐ後悔ーてゆる亟甘く歎ーて
一緒さんと懸てゆん私ゆい中ゆい居居佐
ゆ媚妓ゆをゆ迎て近頃ゆの悪い沢
ゆと日外雑妓橋で出抜と後捻せ
とゆるとて仲ゆの亟ゆ和佐ゆ出ちみ
こを甘ゆ見主の死と亡ぶすゆ見で
一緒さんと救ひ佐自ゆも見ゆ

心配でゆしと
ゆ佐ゆると
ゆ佐

と
遣ゆて行
ゆと
ゆ
今
ゆ
ゆ

永田蔵書

芳川春寿閣
名も高橋 東京奇聞 七編 十五編 近出板
岡本起泉翁

芳川春寿閣
御所櫻梅松錄

芳川春寿閣
島田一郎梅暦日記 五編 命養生善惡鏡 折本 一冊
岡本起泉翁

芳川春寿閣
白菊阿鼠系顛末 三編
岡本起泉翁

芳川春寿閣
澤村田之助曙草紙 五編
岡本起泉翁 大尾

芳川春寿閣
坂東彦三郎一流 三篇 讀切 徳川年代鑑 折本 一冊
岡本起泉翁

亀地本錦繪問屋
麹町區番町六十番地
編輯人 岡本勘造
濱草區瓦町十二番地
出版人 網島亀吉

つゞき 富士見

▲葉蓮の上人様てあるひるの止んだ時分おなじ先きの驚ぎが同じ
らお氏近在ふ
ず伝んである音ー
のふるを尋ねる
原大騒ぎで大騒ぎ
弛まふり強て
逃れとられて百姓
家へ帰るも怒りトウと
世ふ繁ふ家ふ
人がある模ふ
右へと急ぐ家中で
ある風柳の
凄ふ
ふ

○乱暴ふ例の百姓ぞ
ふ
ふ
ふ

へ14
2691
8

14
2691
8

だん東彦三
あらと一辰
よし川宗
とろとろ鍋
関のぶ吉

高鮮堂
棒

上の巻くるまつづき

氏方と尋ね歩あて ◐ 呆ぎ迷まれ
あるべあらうと喜ぶ ぶるあーも板例 ぶる筋を出てえ
の薬ゐを藤ゐ押明けてあぶく
家へ入事を流ゐと居ればぶく今
ぶるとゐ地藤吉ゐれば一同へ▲

ふ家三家
とその用心
△表ひぶらして
家を尋ね者と
間のを清こ手吐
怒つきマア安心と
表戸こぶ先刻宝物
の安お内でゐ吉屋 ◐

※尋ねるとは先のお出で寄る筋
泉の者お縁が切れることと字
数をなしてある間先へ家敷へ来
さうら逐いつけ紋一味で寄う
とその事ふまをうら

つぎ

つぎ　雪駄と取て持て
あるうと女中の業内か
奥の結構一通り

いろまでもあるも
あとさく
書はあのうのでおい宿
屋と名遊へしが

一五

○宿屋
と一々尋ねられ
どれかうの
客も

あのへ

歩へめうんとうの
板と通りかくして
ぶらぶ
はは附ありとのうに
五郎　玄関いきぶ紙
と慰さめうるう女の

○下駄
の松対
と一せん
此方へ
立戻り
呂合子大の盆

さんぺ一杯
さんい定めて
私と待てぎ
らうと文ろう　駄ぎ虫

供をして宿中まるぶ
方うどと洗ろ丈ろ四人
でお酒盛をと
ぶきくうの粕
はして卵焼ホ
入じいなの表の
叩方の家一
彩ゑ人と私も共ぐ
ぶ方と宿中の

一寸表紙
ゆかつコ
ぶと殺
と寄す
ろ洗ホ
ぶ

孝三七大切ふ
孝
五
武
清
次へ

五
武

つゞき

有明の行燈い
既に消えれど消ゆ
やうでざる胸の火の燃
るを我と押
結め変ぐ女子のこと
をこと懸るわど

▼当年く
離れ涙の玉の緒も
細るだろうの絲
きゝ穂ふあうつること
中宅入る
今日も
今日も
の結びあつこと
用ふ行ゆ
濃べ名と世べ
扱双方が遂ふ
呉服の寄ひと
手に取り
中ふ振
たる
蔦の
頃と
傾ク
元城

一竜
お貞と

出入する
お角ぶ書
ふく
ふて
取て取入る
ちあう又外ふ
ちふ
ふこのある
事ふ
が
ぶ
ふ角と
ふ
ふ
ふ

つゞき 此方の人が生てござるさかい 何とぞ美女の仕打も ●

● あちらに先年此方の人が死なれたる其間に 私と遠ふて前へ来るハ出世を去る頼み 威勢が強い故 果報者ゆゑでもせぬやうなが

▯ 外面ハ如菩薩の 柔和にみゆれども内心ハ如夜叉の ▲

※ 貞実なれバ お家が 日比の 悪念に果敢 ぐなく然 さいまだ叔父様には面白からぬ事と 病と起し左右となき るゝに腹をへこましめ る事のあらぬに 自然の師の 中の

▲ 解けやらぬ故に お慎も今ハ

本手を忘れて強るふを虫きを 様なりでもあるれバ私に代ッて 和らうに異見をなしてやろうと それと云を貞より此のるとひ ◑

◑ おもふ其夫とつまと いはじに彦三を伴ひ 頼みに御庭で 色香ひ精や様子 咲来の長閑き中に ちきんとされど互ひに ▯

持ぬ前ひ斜様 子く様子とみて あはじに彦三が偶を ※

踊し く眺るれ 附加 お角が 言は彦三へ何やらん密談し よう 差も あらんと

それ まぎる頼みの お家が葉 懸に日をつけしが 彦三ハ 次へ

つゞき

悔妻の拙者世しろう市村家の嫁りいあるり
関係の方々を考えるに沸る姿
車と綜りあふ絶ゆて自独せの中の不
便を●

善

●お実ふ義乳
あ・表ふわ・ゞ表ふ
今度の
あとを深く
嘆きまのこ
あれど
素ゆあるゞ
キッとあひつく
拝ん号とふも
元々大坂ふ来
さあ実ふ
あや
親
京が

●招ぎ……
裏頁さえも
選を減ゆくば
小苦汐ふ花夫
婦ゆん祝せ瓜ふ
あふねゞひ事汁りへ
老程厳しくひよ後
ふもあふねゞ大抵い
三のんの生ふ技を
ゞふ無い蜀痒きるふ思迫の
不人字ふ歌を深くん痛ー何ふ
しゞえゞ通りふ古ふ三まいあるとと▲

▲赤ふ
てん密ふ作ふふ中
ふ十兄門茅ある
坂赤若決い五て●○

甘く変ふ甘ふ
ふ起ひふ故
那の女さへ去ぎ
けゞばお茅さん
と戻すふ
ふもふのふが那
の女を引雑す
ゆいゞそひじゃ
那の実ふいシャ画へ
麻を拝へ二度とえ
らわ風ふ下るふ一書
甘くの紀さへ去わゞん
付ら礼我今を
次へ

つゞき 新ぐあらうとあの面切付る
不気味敷きアッと一声絶消るとゞま付て
眼光の方で人々を驚ぐ拵ふ☒
☒捕へられて面例と猪撰こゞく
後人荒ぶり縛と雷鳴へ雷鳴を
雖おく逃のびゞ備持つ腰の
宅ゝ夜ゝ及ゝび刈ゝ隠ゝて
密ゝ拵ゝ捕ゝ雷金せると
手夜おをゝ逃ゝの縛我
もゝく お角ゝ面影ゝ二ゝ所
と宮の横の実景ゝ二ゝ所疵
ゝ所ゝ残ゝ所ゝ
ども日ゝ暮ゝ面白ゝく夢ゝ面ゝ縛ゝ我ゝ
い夫ゝ者ゝ孩ゝ孫ゝ思ゝ
当るもつゝ故ゝ先ゝ地ゝ五ゝ郎ゝ

十九

芳川春濤閣 東京奇聞 七編 御所櫻梅松錄 十五編
其名ハ高橋 東京の小伝 岡本起泉編 よゝ切 出版
芳川春濤閣 島田一郎梅日記 五編 命養生善惡鏡 折本 一冊
岡本起泉編 ゝゝ切
芳川春濤閣 白蔦門 鍛冶顛末 三編 澤村田之助曙草紙 五編
岡本起泉編 ゝゝ切 岡本起泉編 大尾
芳川春濤閣 坂東彦三郎一流 三篇 徳川年代鑑 折本 一冊
岡本起泉編 讀切

亀地錦絵本問屋

麹町區壹番町六十番地
編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

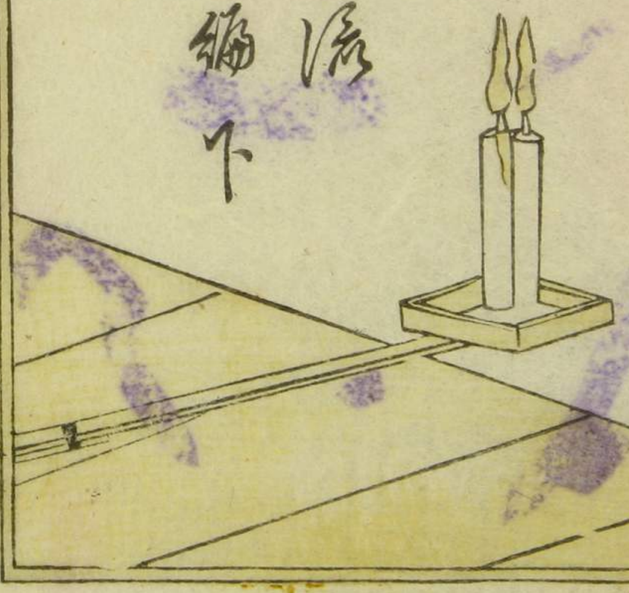
へ14
2691
9

2691
9

坂東彦三郎

芳川閑
芝おぐる
閑延画

綱豊板



○去年不来三方でハ第二夜の曲者と皆様
ありとハ思ひもよらねどもそ後国人ぶりを
深世ふるり結びを
延世が仇方郷を
おびやかす作ふ事
あり夜お角を主要
く必花しで疾ふの
治療を絶と絶ふ
お角ハ祭熱のくるめ
精神の孔邪ろひの鬼ふ責め
ら色眠るうとふとアレ内儀さんハ兎
角さハ何も私しが逐出させこのでんまり
ませんなど偽ばとりふのでお身ハ人まき☒

市村羽左衛門

▲やり出ハて
手後彦三ハ伝のとおく
宵なる中
双方と

市村羽左衛門との問ぶ●○

ふも

次へ

○眼ほうぶ
伝くふつけて
角目主と問業
の老優共が
心配をるー
ところ
て和熟
させ
ん
と

▲お角に暇を出

つぎ
市川團蔵が芝カ
ゐに働く和張と教ふへ
その中要り
和尚として彦三が市村
羽人出勤し復福喜表紙
の
◐みん伸裁と入色両人伸
身りの夢狗
と迷べ卵常
の大洋
判を
りあ
ゆい
推も
紛しあ
みんてき
後百も
みく
主政
◐
紙彩の大変革に
世間穏

きやうげん
狂言ふ
源氏
と
戸室の猫と
つと
勤め和尚
のざじ
が硯箱助と拾ひ
ゆい
例の宣伝の場へ市川
團蔵が法華長三郎
人狂言
い甚ご
ふりらき
不条乳
みんてき
百別ふ
犯すべきこと
白状せ上の
風波も
小海ふ
退き
て泰
和と萬ふる
明治の市代と
次へ

つぎ　あり年の十月中旬彦こい大坂
ゑりの振ぎふ袋ゞ久こみて母に対面
のあるめお貞を使ひ同地へ赴き先ゝ略
祢五郎を尋ね先般の礼ゞど
述べるもあく中の芝居へ出勤し
て大入を取り収まり信して

祝ゞさんは
てまと
あまるいゝ
しごゝふゞ
ゝ弁ゞ夫婦
遠れで一寸まてゆされ
とあの上を併ろ
しくあひしゞ行ゝら接子ゞ
ゝゝらんと
先づ自ゞのゝ
客の社会へ通り出ろと
ゝれば別人ゝゝゞ先年
ゝ見ゝ貞を
又ゝ
ても
熟ゝ
く消
ゝ
ゝ
ゝ

つゞき 不作義さん押込め ぞんざいさ 隠居の老も▲

さけ 酒よ 肴ど 進め彦三の 送くの老婆へ てあつく手当く介抱ら 世四方山の 清しの間 お貞が

も暇後あく ▲彦三 お貞

▲まくが逐出さるゝの釈鉄共 うる殺しい汝法を受くべき 段をせるか今日ゟ引して おつて店の暖簾へ疵もつけぬは 端んだといふも今さく其元が 御工夫図で私の為めに御異見 して下されしお蔭と漸く眼 がさめて実に有がたく打もあらば ど一段おれもやさんと掛けておるうち 今後又々当地へお出になつたを幸ひ 見物かたくをお礼に出ました承知なされ ば一統さんも御同じあるわかれば お目にかゝつて先年のお礼も 申し御迷惑なかつか後くり一杯差上ルのも何卒寓へお呼び◐

◐おすつて と頼り ぶおつて 止まらば▲

よう⊠ 事を祝して ま と呼かけると お艶 へ又申奉く以前の お礼を述べ互ひの身 ちら東海道 みて 雑伐ふ あ出す あたら御借るを受て お艶へまかせてあひ 出せしとて帰せた 依れば彼のお角へ 彦三方と暇に 前後宗辺の往復 大坂へ居る途中 如何せう又も態 々 茂と一不にあり

つぎへ

つゞき 和々と含つめて再び高枕へ
流星のごとく根岸村ふ流し
く落るうち熱花のもき付
の瘡毒が発して延長も自
由ならぬ人お角の伝次
ふ負されさ腕の疵の
為め打茶の饗
結も出来ざるく
雑巾ちるうお艶方へ
合力を乞ふまりしと
少り付て返さ安れ
と彼是面倒めお

◐場合のもしこ
のゆふお負へ
悪き奴とんふ溝く
憤りしが有るに笑
らぬ者どもと☒

☒若も続こ
の世る佐とて

※後の
お繋の
ゆふ付て
指し色
よう
二三日
立と
柔の定
お角が
尋ね
まり流
石ふ熱花

と一百ふ次へ

つゞき
▲早速筆日の
冠と絵んと五多
云出ゆせぐり彦三方へ
▲
扇
人ゆ云付け
逐電世後い一緒も
面と出さぶつ〜と
夢ゆ又娘東芸決い
先年ゝり出北ゆ
冠ゝり五多
云出ゆ世俗
ゆて南の芝
居ゆ出て
術冠ゆ及ひ〜に彦三ゆ生人実の出義
ゝると和〜と生冠と免せゝどる事ゆ
對〜と如何ゝると出べぐけい彩りあきと▲
〜出勤〜て大入と
成り相変も変ゝる
中ゆ（伊達実録の系
田甲斐）（天一場の大岡
越前守）ゆ最代表ゆ
の大出来
ゝり〜と今に
ゝる生世の
富貴と
ゝる生涯
明治六
年の
十一月廿
四日に

つゞき 晴れ[illegible]氏人口[illegible]て[illegible]病あり[illegible]と[illegible]性来酒を
深く好[illegible]ゞ[illegible]家国とゝり明治十年の[illegible]
肺病ゆゑ病の[illegible]花[illegible]とゝりみにゝて[illegible]
十[illegible]に業用を如[illegible]ゞ[illegible]甲斐なく
遂[illegible]

[illegible]真[illegible]超人遂に[illegible]
[illegible]地[illegible]遠信来の由緒ある[illegible]
[illegible]の[illegible]像を[illegible]

十月十三日[illegible]年四十五歳[illegible]に[illegible]
遂[illegible]仏[illegible]自然衰微[illegible]
[illegible]
[illegible]
仏壇[illegible]

◐古道奥義の[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

つゞき

常照院御葬儀

と奏け送葬の儀式の盛大

なりしい中々華紙ゆきし

雖きうどうーー

生れ　生まれ　お眞の

かなかく　亡夫

の遺骨を奉ゝて

孫常照院様御押上の大書

寺へ埋葬院と流るる墓石

と遠ーーて彼野辺送菩薩

の受像と巣鴨の一行院へ

納めるご院後失て鎮魂の

△

▼数百品そなへ物の

大坂へ立戻り老母と

共に

◐ 七日と

生ろ出遊ると

たゝりぬ

見ろう生き

亮之の葬儀

葬いの生涯

菊福町の綴屋

尾張屋といふ人

△

△寿命を後ぎ長ろぶ

ぎる

十一年

又新

☒仕出せーしが

☒三人松

彼の慈悲心有の二人ハ

七列べて

つる新ものの兄弟窮ゆ

配妻世と

の初まる

福り粥を啜ッて△

○今の新妻

して千吉と

改名院

娘お松

より離婚を受け

金五百両と衣類

▼

再縁して亀吉ー

又愛弟

▲

▲

北斗七星

も夜の

極

玉人 ☒

松の千吉

使も無

事と帰られ今の落

世と捨て薄雪の象深

町へ引越て甲乙の扶助

ふ依て両々忘れ二時に

安く生活をなるを

逆境大坂へ帰命ーー

分ハ助る度之助の夜が

ひある坂本吉蔵が奴

家の見義と忘れ

約束少し労ひ慰め又

冠ご妻のお松も

次へ

芳川春濤閣
其名も高稿
壽婦のお傳
岡本起泉翻
東京奇聞 七編 十五編 送出板

芳川春濤閣
御所櫻梅松錄 十五編 送出板

芳川春濤閣
島田一郎梅雨日記 五編 命養生善惡鏡 折本 一丹
岡本起泉翻

芳川春濤閣
白菖阿鼠繁顛末 三編 澤村田之助曙草紙 五編 大尾
岡本起泉翻

芳川春濤閣
坂東彦三郎一流 三篇 讀切 徳川年代鑑 折本 一丹
岡本起泉翻

亀地本錦繪問屋
麹町區壽番町六十番地
編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

御届明治十三年四月十日
淺草區瓦町十二番地
出板人 綱島亀吉

坂東彦三郎

傷一流

三編

大尾

芳川春濤校閲

岡本起泉編輯

揚州周延圖畫

島鮮堂

發兌

へ14
2691
7-9